

# 東奥日報

2022年(令和4年)10月21日(金曜日) (25)

人をつくる

地域と歩む

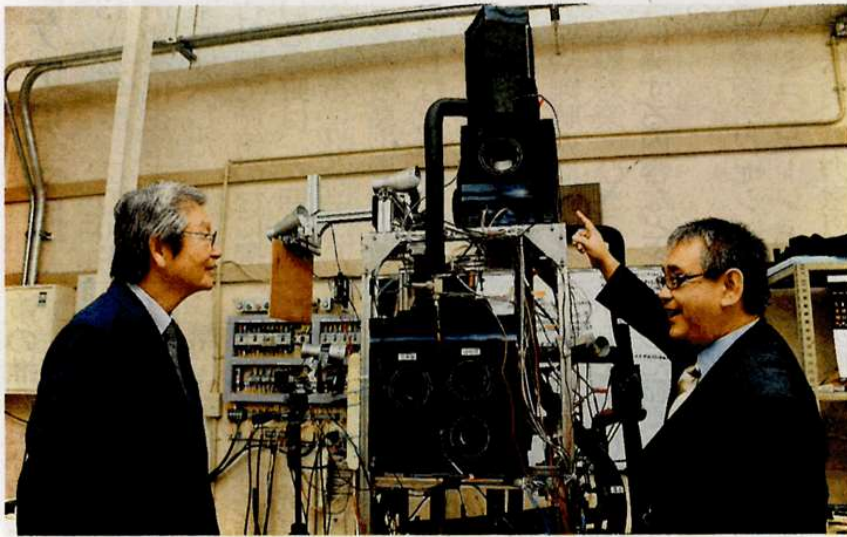
八戸工業大学半世紀

50年の歴史を振り返ると、八戸工業大学は地域の課題解決につながる多種多様な研究開発、実現が難しいとされる困難な研究テーマに取り組み、成果を挙げてきた。

近年は「八戸版医工連携」が注目を集めている。工学部の浅川拓克准教授が八戸市立市民病院の今明秀院長と開発した、へき地での救命率向上を目的とした移動型緊急手術室(通称ドクターカーV3)が昨年4月、文部科学大臣表彰の科学技術賞(開発部門)を受賞した。大手企業や有名大学の受賞が多い中、地方の私大と自治体病院の研究が高く評価され、関係者は喜びに沸いた。

浅川准教授は「リスクや実現性などの面で、他大学ならストップがかか

## 工学研究



学内に設置している実験用の吸収冷凍機を確認する野田教授(左)と折田教授。大学の研究成果を地域で役立ててもらうことが2人の目標だ

## 困難なテーマで成果

りそんな研究だが、本学は研究に使える外部資金を提案するなど、自由にやらせてくれた。受賞は関係者の皆さんのおかげ」と感謝する。

脱炭素社会、持続可能な開発目標(SDGs)など地球規模の課題に関する研究も進む。同学部

の野田英彦教授は2020年度から新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の産学官研究プロジェクトに参画、複数の大学や企業と共に環境負荷を抑制しつつ高効率な廃プラスチック処理システム構築に向けた研究に取り組んでいる。

野田教授は20年ほど前から100度以下の熱を動力とした吸収冷凍機の研究に着手。独自に開発した冷媒などを使って従来難しいとされた氷点下の冷熱製造を可能とした。プロジェクトは24年度までの予定で、プラスチック焼却時に生じる2

00度以下の排熱で氷点下の冷熱を作る吸収冷凍機の開発を目標としている。

元日立製作所の研究者で九州大の後輩でもある同学部の折田久幸教授と共に、世界的に例のない技術の確立を目指す。野田教授は「成果を地域で役立ててもらい、世界にも発信したい」と意気込む。

学生も先駆的な研究の一翼を担っている。大学院工学研究科電子電気・情報工学専攻博士前期課程2年の竹内健次郎さん(24)は、工学部システム

坂本植智学長は将来を見据え「これからの時代、産学官金の連携をいかに深めるかが大事。一つの目的に向かって協働できるように、それぞれの組織の壁を溶かしていくのが本学の役割」と強調する。開学当初から掲げる「良き技術は、良き人格から生まれる」の教育理念の下、専門力・人間力を備えた地域を支える人材の育成と社会貢献に力を注ぐ。

(千葉真由美)

※ 「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」